

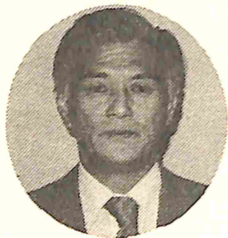
ふるさとの
かたりべ

第7集



発行 嘉瀬ふるさとを探る会





「かたりべ」に寄せて

金木町教育委員会

教育長 近藤 慶一郎

「かたりべ」私はこの言葉の中に、「嘉瀬ふるさとを探る会」の方々の、ふるさとへの限りない愛着と先祖からの生活のにおいの泌み込んだ文化遺産を何とかして後世に伝えようとする情熱と意欲を感じとっているわけでございます。

然も、その調査、研究にたゆまざるご努力とご苦心が払われて第七集の発刊をみたことに敬意を表しますと共に、この度の金木町褒賞受賞もけだし当然の事と心からお祝い申し上げます。

第一集でしたか外崎三千男先生の柿本人麻呂を読ませていただき、その後、梅原猛著「水底の歌」篠原史憲著「いろは歌の謎」などを読み、先生のご造詣の深さに驚嘆致しております。毎集どの頁を開いてみても興味の儘きないものばかりで、小・中学校の社会科の副教材としても価値あるものと確信致しております。

21世紀が「心の時代」と云われるならば「かたりべ」を通して、青少年の「愛郷心」、「先祖を救う心」、「物を大切にすること」などが培われることを期待し、今後より一層のご研鑽をお祈り申し上げます。

《表紙解説》

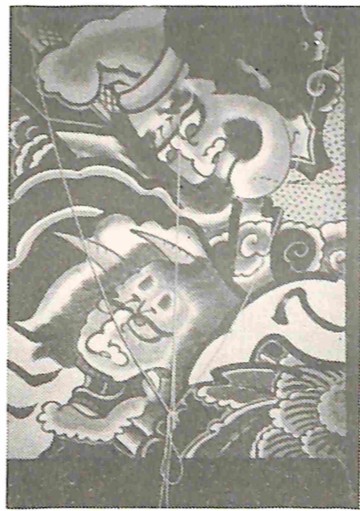
津軽 凧

青森県内の凧を大別すると津軽凧（津軽一帯）・青森凧（青森付近）・本郷凧（浪岡付近）・南部凧（八戸付近）の四種類になる。そのうち津軽凧については天保年間にはじまり、一時禁止令が出たときもあったが、津軽一円で毎年凧あげで賑わったという記録が残されている。

絵柄は、江戸凧の影響をうけているが、特に津軽候の江戸屋敷に葛飾北斎がたびたび招かれて絵筆を披露したのがはじまりと伝えられている。

骨組みに他県では竹を用いているが、津軽凧は青森県特産のヒバ材の柂目板で組立てているのが大きな特徴となっている。凧絵の紙は、西の内紙（茨城県久慈郡西野内産）を用い、西の内一枚は三十三センチメートル×八・五センチメートルで、その使用枚数によって大きさを表わし、色は染料を用いている。

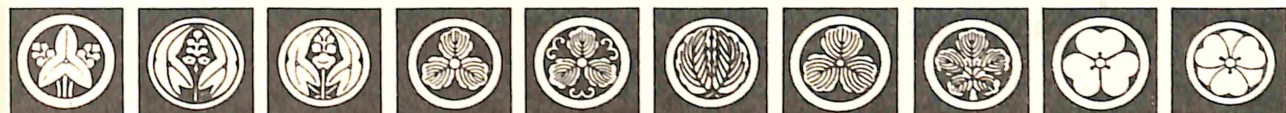
題材としては、神功皇后、日本武尊、加藤清正など日本の歴史上の人物や水滸伝、三国志などの英雄が主で、子供の立身出世に願いをこめて製作したものといわれている。（以上津軽凧の由来より）



嘉瀬も昔から凧あげの盛んな土地で、冬、真白な雪原となる古町の西側の田圃がよく凧あげの場として使われた。また、凧絵の上手な人も多くいて、鬼人お松の絵が流行しみな手作り凧であった。

表紙の凧絵は、その道の達人であった故山中慶吉氏の作品で、昭和四十八年五月嘉瀬小学校新築記念に寄附されたものであり、今も正面玄関を入れて職員室前に二点掲げられている。

〓 山中正津 記 〓



● かたりべ第七集 ●

目次

《表紙》……………津軽風||表紙解説||

《巻頭言》かたりべに寄せて……………金木町教育長 近藤慶一郎 (1)

津軽のイタコ・オリオガイタコ……………沢田 薫 (4)

嘉瀬八幡宮と献納物考……………秋元 惣之進 (6)

風の由来……………秋元 幸之進 (14)

村から農耕馬が消えた……………木村 治利 (15)

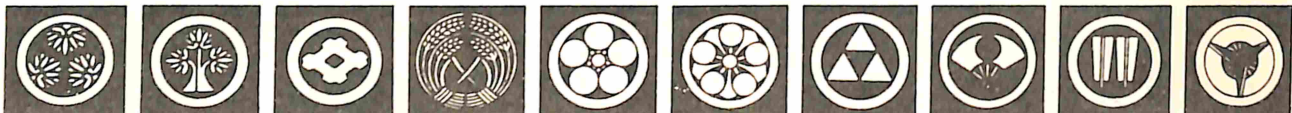
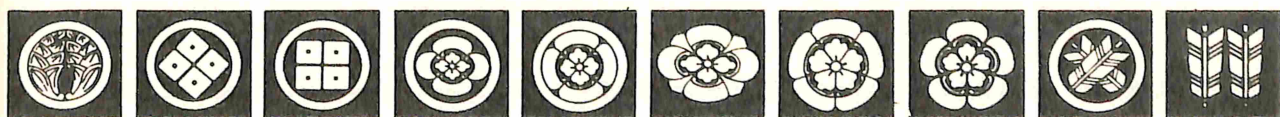
旧聞タコ部屋など……………山 中正 津 (20)

つがる外三郡誌集録……………鳴 海 勲 (27)

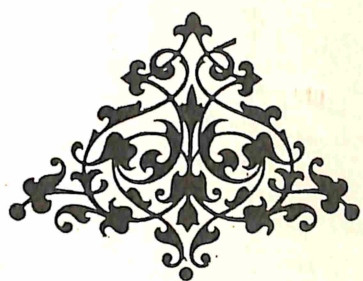
嘉瀬地区の土地改良等に見る記念碑……………嘉瀬の貌……………(33)

素通りした嘉小百十周年……………小山内 嘉一郎 (46)

木造新田散歩……………木村 治利 (47)



上 論
誌 討



◇ 津軽の田面から消えたもの ◇

落穂拾い……………(40) 番太郎……………(42)

堆肥運搬……………(66)

▽ 〈津軽方言詩〉 参詣土産……………(32) 沢田 薫……………(32)

柿本人麻呂の伝記(下編)つづき……………外崎 三千男……………(59)

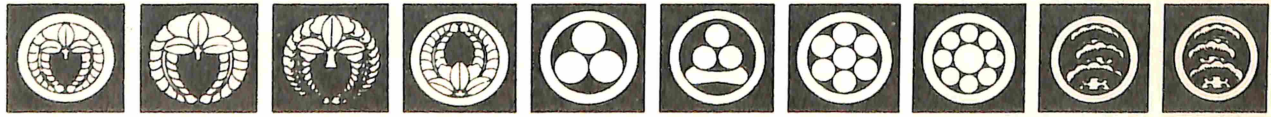
遠くなりにつけり明治の新聞記事を尋ねて……………きのした 清一……………(65)



◇ 江戸小咄二題……………(19) ◇ ひとくちメモ……………(32) (66) (74)

◇ 金木町褒賞……………(77)

◇ あとがき……………(76)

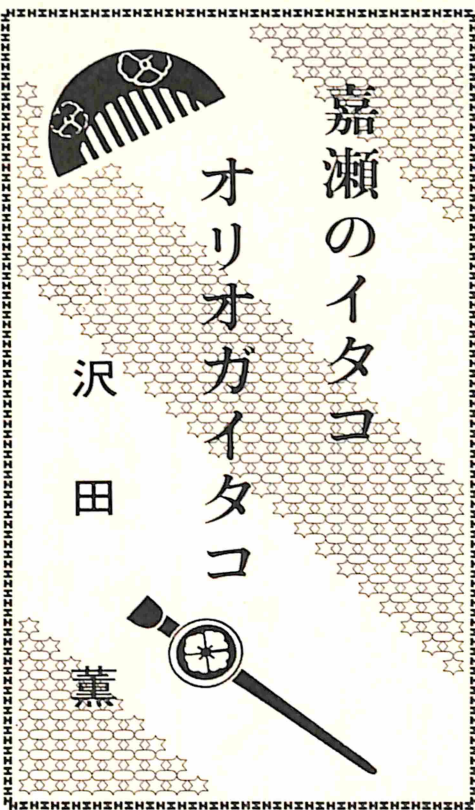


嘉瀬のイタコ

オリオガイタコ

沢田

薫



▷ 写真左 オリオガ中村オリ ◁



弘前市出身、直木賞作家長谷部日出雄氏の刊行本の一つに「津軽空想旅行」（津軽書房刊）がある。その本の中に、本州北端のイタコの記事がある。その項を読み進むうちに、（以下一部を抜粋する）

『地元の車力村にもイタコはいたが、当時ノドンジャガのハルイタコといえ、カヘ（嘉瀬）のオリイタコと並んで、この地方でもっとも評判が高かったのである。』

オリイタコは、小さいときから私の身内と聞えていたので、調べ廻ってみた。

カヘ（嘉瀬）のオリイタコは北津軽郡嘉瀬村二百十番戸（畑中）に父中村永助、母くらの長女として、明治七年八月廿日に生れた。

本名は変体仮名で「おり」以下「おり」と書く。二女「りつ」明治十年三月十日生れ、は私の祖母。長男要作、明治十二年十二月十日生れ、

は鎌田稲辰さんが常日頃よく言っていた「桃ア唄コ上手であったバテ、イン兄要作サかがれば、桃もどへもへなくてあったネ」の要作である。

大正十年頃中村要作一家は北海道十勝へ引っ越す。嘉瀬に残ったのは、要作の姉おり、りつ、妹おん（秋元幸之進の祖父の弟に嫁す）ゆわ（沢田忠勝の祖母）のよ（野上ミツオの母、ミツオさんは現在松川秀一さんの妻）。みな（沢田沢八、私の祖父の弟に嫁し、男の子良雄を生み早世）

妹達は全部結婚しているのに、長女おりだけは結婚していない。やっぱり盲であったからだらう。結婚しないで中村家十勝へ引っ越した後、おりは一人で嘉瀬の何処に居たのだらうか。親類の年寄りには、ほとんど死んでいる。聞きようがないと思っていた。

ところが、おぼろげながらも知っていた人が見つかった。しかも写真（別掲）まで持っていた。前述の、のよの娘旧性野上ミツオさんでした。

以下野上ミツオさんからの聞き書きである。

野上ミツオさんの母のよは、下高根の野上多助と結婚、故あって夫婦とも嘉瀬に転居して嘉瀬で暮らす。その野上家と、おりは一緒に居たと言うのです。初めはおりのすぐの妹おん達とも一緒に、下古町の秋元貞雄さんの処（通称、近所では奴家と呼んでいた）、秋元貞雄さんは秋元幸之進の別家、その後中村正敏さん屋敷の北端れ。（二ヶ所とも私が小さい頃何回も遊びに行っているが、その時おりが居たのか私には分らなかった。）に移住。

おりは生れながら盲でなかった。青春期の十八歳のある夜、突然目が痛みだし、一晩病んで、そのまま失明したという。今の病名でいけば何んだったのだらうか、体は大柄で性格も明るく、もの事にくよくよしない娘だったので、突然盲になった己れの人生にも落ちこまず、その時から敢然と「まなぐ見なくなつたハデ、わ、修業してイタコになる。」とイタコの修業に出て行ったという。どこのイタコへ修業に行ったのか、何年修業したかも残念ながら不明。ミツオさん達と一緒に暮らしていたときは、大柄な体の肩から大きな黒い数珠をかけ、その数珠玉を数えながら、霊界のことは勿論、縁談、失せ物等も占い、それがよく当るので大繁盛したものだという。

下古町の秋元貞雄さんの屋敷（現原田万治さんが管理している）も、イタコの実入りで購入し三姉妹家族一緒に居たそうだが、兄弟は他人のはじまりの例にもれず、仲互いとなり、その屋敷をすぐ下の妹、おんに渡して野上の家族と一緒に、中村正敏さん屋敷内に移住する。ミツオさんは言う「当時どこでも貧乏で物の食いなかった時代、おりイタコにあがる菓子類を貰ってたべたくて近所の子供達は私と遊びたがった」と。

おりイタコの師匠は分らなかったが、弟子は沢山いて、その中で今でも名前の分っているのは、中柏木原善のオミヨ（この人は目明き）大沢内のハナ、同じく大沢内のソワなどである。

盲であったおりも遅まきながら結婚する事になる。大正元年の年、明治七年生れであるから二十九歳か、相手は四歳年上で二人の子連れの中村嘉四太郎と云う人、住所は金木町蒔田四十五番戸、入り婿であるので、嘉瀬に来て一緒に住む。中村嘉四太郎は通称オンチャと呼ばれ、嘉瀬村役場の小使いをやっていたという。当時の村長髯の工藤保次郎さん達と嘉瀬役場前で写した写真もミツオさんから見せてもらった。ミツオさんは、そのオンチャから非常に可愛いがってもらったと、具体的な物語りなどしてくれた。

そして、ミツオさんは言う

「私の弟正雄（野上正男、筆者より一歳下）が、四、五歳頃か、おりの傍で元気で遊び廻っている姿を見て、おりは、この子は長生きしない子だ」と一言。

その後、その一言が当たったのが、いい事か悪いことか知らないが、正雄は敗戦の翌々年二十二歳で若死した。

ミツオさん八歳のときと言うから、昭和二年か、おりは中村正敏さん北側屋敷内で、野上一家に見送られ盲の人生に終りを告げる。享年五十二歳か、その二年前、夫の通称オンチャも死亡している。

結局、おりには子供がなかったが、夫の連れ子忠太郎と、おりの妹おんの娘タミと一緒にいる、その子、孫と続いて北海道に住んでいるらしいが、私達親類に消息はない。

嘉瀬八幡宮と猷納物考



秋 元 惣之進

嘉瀬八幡宮の祭神は、応神天皇(誉田別命)西暦四一三年約一、五七五年前を祀っておるが、応神天皇は、自から弓矢を取り乱世を鎮めた弓矢の武神で崇拜されたと言う。

神社の中で最も広く信仰されておる一ツに何々八幡宮と言う「社」が一般的だが祭神は、神武天皇の「第三皇子」説、「ウガヤフキ アイズノミコト」説と「ヒコホホ デミノミコト」説が信じられているが「ヒコホホ デミノミコト」説が正しいとされている。奈良時代から平安時代に入って貞観二年(一、二二八年前)八六〇石清水(京都)に僧行教が応神天皇説を支持、この説が次第に広まったが信仰の起源は宇佐八幡(九州)で、応神天皇を祀る八幡信仰が生れ其の地位も高まり、やがて皇族の流れを汲む源氏の氏神となり全国的に祀られたと言う。平安時代中期の武将、源頼義の子 源義家は「八幡太郎義家」と襲名 父頼義と共に前九年の役に出陣(永承六年)天喜(康平六年)一〇五一(一〇六二)約九三七年前)弓矢の武神源氏の氏神(応神天皇)を主神

とした八幡船(倭寇)

日本人の意 朝鮮

中国の沿岸をあらした

海賊日本人 朝鮮人

ポルトガル人も加わっ

ていたと言う) 源義家

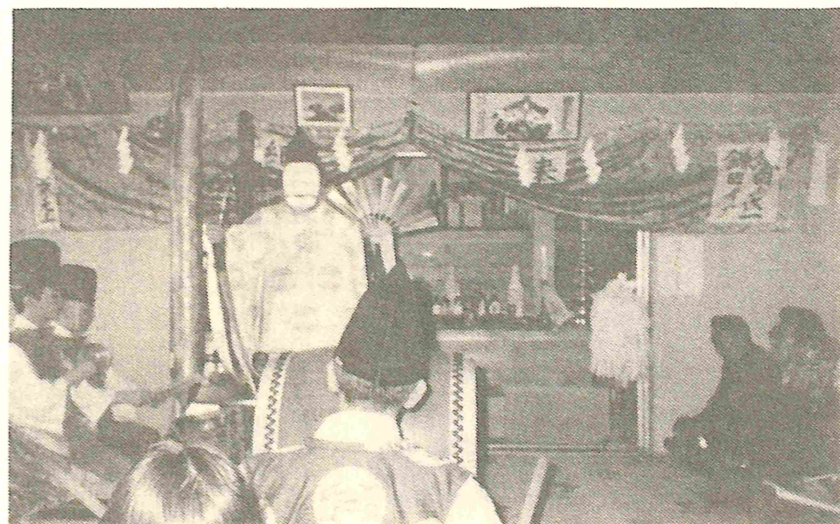
は八幡大菩薩「八ツの

幡」災難、飢、渴、寒

暑、水、火、刀と書いた(のぼ)

が、八幡宮は八幡太郎義家の氏神で、弓矢の武神 応神天皇を主神としたので、八幡宮は八幡宮を祀って鎮座しておると言う。

約七五六年前の文治五年(一一八九)安部貞季の作図に依ると、すでに当時から嘉瀬城が築城されており、嘉瀬は築城以前に小集落が形成されておったとの伝承がある。



嘉瀬八幡宮「津軽神楽」

住時には何処の集落でも小集落が出来ると、集落の「護り本尊」として祠を祀る慣習があった。嘉瀬も約八〇〇年以前に集落が構成存在しておったものと考察され、この頃から貧弱ながらも嘉瀬北西の小高い丘陵の平坦地に小さな祠が祀られておったが年々歳々次第に老朽化し、集落の人々は相談の末、元龜二年(約四一四年前)一五七(一)を再建したが再建後、十六年目、天正十五年(約三九九年前)一五八(七)に嘉瀬城は勿論のこと、祠お宮や、お寺、集落、古文書等が焼き払られた。其れから十数年後に嘉瀬の集落も次第に落着き、開田が進み、復興を見て集落の人々は八幡宮再建に意欲を燃やし、熟慮の末、再建を決めたが勿論、先立つのは資金で、嘉瀬は勿論、近隣の村々からも浄財を募ったが思う様に集らず数年後にやっとめどが付き、近隣の村々は勿論、弘前や羽後(秋田)陸中(岩手)羽前(山形)などから「宮大工」を募り、金木代官所材木奉行からは中山山脈の良質の松葉材を払い下げて貰い、柚夫や其の他の人夫を雇入れ小高い丘陵地を整地して七五年後の寛文二年(約三二四年前)一六六(三)立派な神社が再興された。建立と同時に金木代官所材木奉行 阿部貞季光則に嘉瀬集落民は神社の命名を依頼、

それ迄は祠神社に命名も無く只だ神様と拝んで崇拝しておったが阿部貞季光則は、応神天皇の信奉者だったので、応神天皇を「主神」とした八幡宮(源義家)八幡太郎義家」と命名した。

又、元禄十二年(約二八七年前)一一九九嘉瀬八幡宮は新田開拓祈願所となったが貞保四年(二九八年前)一六八(七)の検地帳に依ると除地として、

「八幡社地 五間 三間拾五歩」とある。社司は佐々木神太夫祐家、御供米一石二斗 本社 榎茸(木でふいた屋根) 建坪 三尺五寸に三尺

四間に三間の神楽殿あり、寛文六年(一九二年前)一七九(四)と文政五年(一六三年前)一八二(二)の棟札が記録されるとあり、除地として八幡社地 一町一畝四歩あり、祭神は誉田別命(応神天皇) 旧村の祭日は祈年祭四月一日、例祭五月五日、新嘗祭十一月二十九日。安政二年(一三〇年前)一八五(六)の神社微細社司 由緒調書上帳では四月五日神楽執行 九月五日 祈禱執行とあり、「建立年月日不詳 寛文二年再建三二四年前一六六二」とある。

明治六年(一一二年前)一八七(三)には村社に昇格した。

大正五年(約七〇年前)一九一(六)八幡宮社 拜殿前に安置された六尺余の堂々とした「太政大臣」の像は、冷コ水町内で奉納し、「右大臣」は畑中町内で、「左大臣」は派立町内の各町内で寄進安置し、村の安泰を祈り崇拝しておりましたが、昭和五年八月十八日午後五時十六分頃、子供の火花の不始末から出火し、折からの東の強風に煽られ拜殿、奥の院等 御神体は運び出したものの、村人の必死の消火作業にも拘らず遂に全焼した。

今、往昔を偲ぶと私達の先祖の生活は静けさと自然の中で平和に暮らしてきたであろうが、衣食住の充実感はどうであったか、艱難辛苦の道にたどったと思われる。現代の豊かな暖衣住飽食 ありあまる物の中に埋まっている私達は、いかに世相の批判、理由があるにしろ、一世紀、いや半世紀以前とは比較にならない格段の差がある。

昔を偲ぶと現在の生活からは、想像を逸する苦勞に満ちた過度の重労働、其の中に東風(ヤマセ)、早魃(日照り)、悪疫流行、突然襲う飢饉、悲惨な生活が村人を襲ったであろう。

この期の人々は不幸、不運を排除するため村中安全、家内安息等を村社や村の辻にある百万遍や庚申塚、二十三夜様と其の他の石塔碑、石塚などに造立された碑に身命をなげうって祈願したものと思われる。

古老から聞き、資料を集め一部抜粋をし私なりに石塔碑や石塚などの由来を探り、綴って見たいと思う。

① 神 楽

昔から嘉瀬の八幡宮でも毎年、神楽が春秋二回奉納される。春の神楽は今年も村人の健康と幸せを祈り五穀豊穡を願うが、秋の神楽は村人の健康と幸せ、五穀豊穡の感謝の意である。神楽は神前で神霊を慰める為の呪力の舞踊で、その信仰を説く最古の物語は天岩屋戸の天宇受売命の舞で、これは鎮魂(たましずめ)の舞踊と言う。

② 護 符

護符、お守り、お守札ともいって病気、災難、盗難、火災など、さまざまな災いを防ぎ護ると言う神秘的な「力」を持っていると信じられた。身を護る符で、中には身につけて持っているものや門口に貼るもの、紙や石、又、木板など用いたものもある。

③ 八 幡 宮 橋

八幡宮に入る寸前に川幅の大きな川がある。其の名は小田川で嘉瀬の水田をうるおしている。その小田川に長さ約四五・二米、幅三・二米の立派な鉄筋コンクリートの太鼓張りの永久橋が朱色に輝き遠くからでも

目立って見える。工事費、四千五百万円で完成。昭和六十年十二月三日竣工、狭い川幅と蛇行を直線に改修したのを期に、又、八幡宮前である為の記念に立派な大橋にした。大橋は欄干があり欄干には金属性の立派な擬宝珠がある。

④ 鳥 居

八幡宮境内には立派な鳥居が八基ある。鳥居の起源は不明だが、十四世紀頃と言われる、鳥居は神様のいる場所を知らせる一種の門だった。鳥居ははじめの頃、二本の柱に「しめなわ」を結びつけた簡単なものだったが次第に現代風になり、鳥居の種類は数種類有って、山王鳥居、住吉鳥居、明神鳥居、鹿島鳥居、神明鳥居、八幡鳥居、四脚鳥居、三柱鳥居、各種があるという。嘉瀬の鳥居は明神鳥居と言う。所で鳥居の呼び名ですが「鳥がよくとまり居る」とか「人が通り入る」とかと、いったことから鳥居の名前が付いたと言う。

⑤ 御 幣

御幣は古くは、一般的に神に奉げるさまざまな財物を言ったが、古い時代には布帛(着物のキレ)が貴かったので、帛を神に奉げて崇拜の心を現わした。布帛を神前に捧げる時に木や竹などに結んで挿したので御幣といわれ、神の依代(よりしろ)の具と考えたと言う。

⑥ 地 蔵 様

お宮に入る道路の南側に地藏堂がある。何処の村でも村の入口や村の

辻などに地藏様が赤い頭布を冠り、綺麗な着物を着て小さな前掛をさげている。

幼くして死んだ我が子や夫、親と早く別れた人々が悲しみのあまりに、又、地藏尊は幽明の境にあって苦境に落ちんとしている亡者を救うと信じられておるが、色々な悩みごとをお祈りするのが一般的である。

又、昔は地藏堂の傍には必ずといって良い程「後生車」が二〜三基建っていた。

この「後生車」は人に見られないようにして、自分の年令だけ回してから願いごとを頼むと願いごとが叶うと言う。又、逆もどりすると願いごとが叶いられないと言う 語り伝いがある

⑦ 燈 籠

八幡宮参道の西側には、石燈籠が四基建てられて居り、又、入口には木製の高さ一丈余(三米余)の朱塗りの立派な燈籠が二基建てられて居る。

燈籠は神が参道を通る時の明りの「灯火」であり神社の前にある燈籠は門燈である。

⑧ 二十三日塚

拜殿に向う東側の端に二十三日塚が見受られる。昔は旧二十三日の晩に、主にバサマ達が講中をつくって旧暦の一月、五月、十月の各二十三日を例祭日として仲間の家集って、山の端から登るお月様を拜んで、お月様の登り具合を見て其の年の豊凶を占った。豊作の年はお月様が舟に乗って「ヘラリご飯をもるヘラ」を持って来るが、不作の年は「シヤ

クシ川お汁をもるシャモジ」を持って登ると言う。又、二十三日は、月夜見命、月読命、月弓命などの神の名があるが、月読命は天照大神の弟神で月の国を統括する夜の守護神であり、潮の干潮を司る神ともいわれている。

八十八夜は陽歴の二月四日頃の立春から数えて八十八日の日、五月一日〜二日頃に当る。この頃になると霜もおりなくなり農作物を育てるに心配が無くなるので「八十八夜の別れ霜」と言う。

⑨ 狛 犬 ・ 唐 獅 子

狛犬は神社の門衛的な魔よけで、犬は警戒心に富み邪魔物を追い払うので魔除けの守護で、獅子も亦百獣を威圧するから、獅子と狛犬の合体が一般的だが、中国で祥瑞の獣とする「兕」で形が似ているので高麗の犬と言った。普通、向って右側が口を開いて「阿形」を表現し、左側は口を閉じて「吽形」を表現している。阿吽の獅子 狛犬という。

⑩ 大 黒 様 ・ 恵 比 寿 様

大黒天は印度の摩訶迦羅で訳して大黒天神と言った。貧しい衆生に福徳を授け、戦の神でもあり鎌倉時代から庶民化され、福の神として祀られ大黒様も、大黒主命に形どっているが、大黒の音の類似から起ったと言う。

大黒様は仏法を守り飯食を豊かにし、米俵の上で打出の「小槌と袋」を持ち福徳で、恵比寿神と並んでおられるが、大黒様と恵比寿様は七福神の一人で鯛を釣り上げ、ニコニコ笑っておるが、元々は海の豊漁の神様で特に商家で尊つとび商売繁盛の神様で「ニコニコ」笑うと恵比寿顔